

二〇一九年度

中世文学会秋季大会

研究発表要旨

『平家物語』における平重盛―武装しない武人として―

東北大学大学院文学研究科博士後期課程 于 楽

『平家物語』は戦いを記した物語であり、多くの武人が登場している。武人であれば、戦いの場で武装して戦う姿が描かれるのが自然であり、実際に『平家物語』には多くの武装する武人たちの行動が詳しく描き出されているが、そのなかで、作中の主要人物である平重盛は、武門としての平家の棟梁、平清盛の嫡子にして左近衛大将等の武官でありながら、武装した姿がまったく描かれず、烏帽子、直衣といった平服を身につけての言動が理想的なあり方として強調されている。これはたいへん不自然なことであり、『保元物語』、『平治物語』の重盛が武装して晴れがましく戦う姿が詳述されていることを考え合わせると、その不自然さはいつそう際立つ。戦乱の経緯を記しながら、戦わない武人、平重盛を理想化する『平家物語』とはいいたい、いかなる物語であるのか。

本発表では、このような武装しない武人としての重盛に注目して、『平家物語』のしくみを解き明かそうとするものである。従来、『平家物語』の重盛については、作者の思想を代弁し、平家一門の運命を予言する機能が主に問題にされてきたが、本発表では、作者の思想の「代弁者」や物語の展開の「予言者」としての重盛が語る理念や道理に加えて、武装することが語られない武人としてのあり方に着目して、武装しない武人を理想的な人物として描き出す『平家物語』の理想、理念のあり方を捉え直したい。それは、『平家物語』の提示する秩序がいかなるものであるのかを問い直すことでもある。『平家物語』の重盛が武装しない武人として描かれていることの意味を、平清盛、後白河院、高倉院、源頼朝という秩序にかかわる人物との関係にも目を向けながら考察して行きたい。

『愚管抄』の文体とその思想的背景

総合研究大学院大学博士後期課程 児島 啓祐

慈円が『愚管抄』の執筆に際して仮名書きを選択したことはよく知られている。従来の研究をふりかえると、その意図については、以下の三点のように説明されてきた。①口述筆記、聞き書きによってもたらされた方法。②撰閲家、武家の幼学のために見出された方法。③悉曇学の学統（梵和一如観）の中で見出された方法。

①②のような成立環境をめぐる外的要因が文体選択に影響を及ぼしたことも確かに想定されるものの、慈円自身が『愚管抄』を仮名書きすることの意義を記している点には注意を払う必要がある。慈円の述べる『愚管抄』の文体とは、「ハタト・ムズト・シヤクト・ドウト」（巻第二）のような擬態語の表現をあえて選択するものであり、しかも、それを「ヤマトコトバノ本体」（巻第二）と評価するものだった。なぜ擬態語を「和語ノ本体」（巻第七）として特別に称揚するのか、従来の①②③の説では十分に説明ができない。『愚管抄』における擬態語を特に意識した仮名書き表記の理由は、むしろ慈円の内的要因にこそ求められるべきであろう。

慈円の著作群には、「浅略深秘」あるいは「浅深」というような表現が諸処に認められる。これは慈円の学ぶ台密の諸書を読み解く過程において見出された方法と考えられる。それは、「初学」に対し、平易な「浅略」を駆使することで、かえって仏の教えの「深秘」へと至らしめるという内容である。慈円は、実際に密教注釈のなかで見出した「浅略深秘」の方法を、和歌、講式、怨霊供養を通じて実践していた。本発表では、慈円の著した台密関係の注釈書や和歌とその序跋等に見える記述を参照しつつ、『愚管抄』の文体の特質を把握し、著述の意図とその思想的背景について考察する。慈円による「浅略深秘」説の徹底的な実践の所産として、『愚管抄』の異色の文体を位置づけたい。

『千載集』神祇部・「神遊びの歌」考

二松学舎大学文学研究科博士前期課程 古家 愛斗

藤原俊成撰『千載集』神祇部には、大嘗会和歌群が存する。当該歌群には交互に「神遊びの歌」、「神楽歌」が採録されており、「神遊びの歌」と「神楽歌」が異なるものと認識されていたことを物語る。ところが、同時代人である藤原清輔の歌学書『袋草紙』には大嘗会和歌の作法が掲載されているものの、「神遊びの歌」という語は出てこず、「神楽歌」という詞が言及されるのみである。また、管見の限り、「神遊び」という詞は歌の中には存するものの、当該歌群を除けば、『歌枕名寄』に四首入集している以外に詞書に出てくることはなく、部立としても『古今集』に出てくるのみで極めて珍しい語であると言えそうである。それどころか、自撰の私家集である『長秋詠藻』には、俊成が仁安元年（一一六六）に悠紀方として大嘗会和歌を詠んだ記録が残っており、次掲のよう

神楽歌 長峰山

万代を祈りぞかくるながみねの山の榊をさねこじにして（巻中・賀歌・二八六）
と、詞書に「神楽歌」と記されていることが注目される。

また、大嘗会和歌を集成した『大嘗会悠紀主基和歌』を見ても、『千載集』の当該歌群を掲載したものを除けば、やはり「神遊びの歌」という記載はない。しかし、当該歌群にある歌の一部は他出文献においても詞書に「神楽歌」と記されているものであり、用例の少なさからも、やはり「神遊びの歌」という詞書を書き入れた『千載集』の独自性、ひいては俊成の意識が際立っているように思われる。

以上のことを踏まえ、本発表では、当該歌群を一首一首読み解くことにより、俊成にとつて、「神遊びの歌」は神と一体化した舞い手が和歌を口唱するものと解釈されるもので、「神楽歌」は神の存在が人の外部に想定されるように解釈されるものであることを論ずる。また、このような区別が、俊成の歌学書『古来風躰抄』の主張とも大きく関わっていることを示したい。

『千五百番歌合』における先行作品摂取と同時代歌人間の関係

東京大学大学院博士課程 岡本光加里

『千五百番歌合』は後鳥羽院三度目の百首歌として詠進され、のちに歌合に改編された。その特徴の一つは、「本歌取り」とは呼びがたい、多様な特徴を持つ先行作品摂取が認められる点である。例えば表現・大意ともに摂取元と近く、焼き直しにほど近い場合が、俊成などの本歌取りに長けた者にも認められ、意識的に、先行作品に対して新しい要素を加えない摂取も行われたと考えられる。また古歌の作品内部の世界を取り込むのではなく、古歌の作品外部の、作者やその時代について尚古的に詠む例もある。一方、摂取の方法や効果が多様であるのに反して、摂取元として多いのは『伊勢物語』『古今集』の二作品である。この傾向は大多数の出詠者に共通しており、こと『古今集』については、『古今集』中での配列を踏まえて摂取する例などが認められる。

こうした先行作品摂取は、『千五百番歌合』の主催者であり、後の『新古今集』編纂の下命者である後鳥羽院の意向を踏まえたものだろう。『千五百番歌合』の『古今集』重視は『新古今集』の理念に通じ、『千五百番歌合』における先行作品摂取が、『新古今集』編纂時の撰歌作業に結果的に貢献しただろう事例も確認できる。『千五百番歌合』には後鳥羽院歌壇の歌人総勢三十人が参加した。その本作において、多数の歌人が『古今集』等の古典を摂取したことには、和歌史の中に当代を位置づける意味がありえただろう。

ただし本作の先行作品摂取には、同時代歌人の行った摂取の影響を受けている例や他の出詠者の『千五百番歌合』詠を参照したと思われる例、同じ先行作品を摂取する例が、様々な歌人の間に見受けられる。その中には血縁・主従・師弟関係等では説明のつかない場合もあり、後鳥羽院歌壇の多様な歌人間の関係が伺われる。『千五百番歌合』の古典を継承しようとする営みには、むしろ当代の歌壇のあり方がよく現れている。

後鳥羽院歌壇におけるイメーヅ戦略―俊成卿女と源通具の詠歌を通して―

ノートルダム清心女子大学（非） 江草 弥由起

新古今歌人らが『六百番歌合』の俊成判を受けて、歌に物語を盛んに撰取するようになったのは周知の事実である。『源氏物語』は言うまでもなく『狭衣物語』も積極的に撰取が行われた。『狭衣物語』の中でも女二の宮の手習歌場面は殊更に新古今歌人らの関心を引き、多くの歌人が撰取を行っている。これは、望まぬ結婚を余儀なくされた狭衣が己の辛さを訴えた歌を送り、女二の宮は狭衣を拒絶する歌をその側に書きつけ破り捨てたにもかかわらず、女君の意思に反して歌が伝わってしまう場面である。

この場面の悲劇性は女二の宮の側にあり、新古今歌人らの多くが女君側から撰取を行う中、源通具だけが建仁期の『千五百番歌合』にて「世中になびきおきふす下萩も末こす風に露は落ちけり」と、狭衣側からの撰取を行っている。通具が『狭衣物語』を撰取した歌は三首確認でき、いずれも同歌合所収だが、他二首に他の歌人と異なる傾向はない。当該歌だけが明らかに異質である。

その事情を勘案するに、建仁期の通具と俊成卿女の婚姻の破綻が最たる要因と考えることができ。通具ら土御門家が、和歌に執心する後鳥羽院との繋がりを深めるため、家の文化的側面を支えるものとして俊成卿女の存在を重視したことは田淵句美子が指摘する。俊成卿女にその役割を担わせるには、通具との離婚に遺恨がないことを対外的に（特に後鳥羽院に）示す必要があっただろう。その手段として、通具は望まぬ結婚を余儀なくされた狭衣に自己投影した歌を詠じ、俊成卿女との別れがやむを得ないものであったと印象づけるイメーヅ操作を図ったと考えられる。同時期に俊成卿女は同場面の女二の宮になり代わったような歌「消えかへり露ぞ乱るる下萩の末こす風はとふにつけても」（水無瀬恋十五首歌合）を詠じてもいる。本発表は、この和歌によるイメーヅ戦略が互いの繁栄のため双方の家の合意の下で行われたことを明らかにするものである。